

【短縮版】障害とパフォーマンス・アーツ研究会〈第7回〉議事録

日時：平成29年12月1日（金）13：00～16：00

会場：アーツカウンシル東京 大会議室

内容：参加団体の活動紹介④、厚生労働省「障害者文化活動普及支援事業」東京都支援センター「アーツサポ東京」について（社会福祉法人トット基金・佐藤宏美氏）、Tokyo Tokyo FESTIVAL 企画公募の紹介、意見交換

1. 新規参加団体の活動紹介

(1) 日本フィルハーモニー交響楽団（山岸）

- ・ 日本フィルは、舞台上の演奏家集団という狭義のオーケストラとしてだけでなく、スタッフ、支援する方、お客様も含めた大きな社会的集団がオーケストラだと捉えている。年間約150回のオーケストラ形式の演奏活動の他に、年間260回のような活動がある。学校や施設で行うカルテット、クインテットなどのコンサート、演奏会について鑑賞者により理解していただくためのプログラム、オーケストラの団員が行う音楽創作ワークショップなど。活動報告12～13ページのエデュケーション、14～15ページのリージョナル・アクティビティを参照いただきたい。
- ・ 我々は、オーケストラには社会的な役割があると認識している。他のオーケストラも地域社会あるいは教育などへの寄与を意識した活動をしている。日フィルの大きな特徴は、活動の幅が広く、日本のオーケストラで唯一、専任の部署を設けていること。この分野でリーダーシップを取る責任もあると考えている。
- ・ 障害者のためのサポートとしては、チケット料金の割引と、一部の演奏会での点字プログラム作成、パイオニアの体感音響システム（ボディソニック）導入など。パイオニア主催の「身体で聴こう音楽会」に出演もしている。
- ・ 音楽を楽しむ機会を創出するための支援を積極的に行っているが、対象が限定しがちであり、多様な人々に対応するシステムが整っているとは言えない。
- ・ 今回の助成事業で、4月に「耳で聴かないコンサート」と題して、聴覚障害者を主な対象としたコンサートを開催する予定。メディアアーティストの落合陽一氏がつくったLIVE JACKETを用いる。LIVE JACKETは16チャンネルのスピーカーを内蔵した、体で響きを聞くことができる体感音響システムに似たもの。ロックバンドの

プロモーションなどに使用されるものだが、これを着て初めて音楽が分かったと、聴覚障害の方から大きな反響があったと聞く。私も着用してみて、コンサートホールで響きを体で受ける感覚と似ていると感銘を受け、このシステムをコンサートに使えないか考えた。

(2) ソケリッサ (アオキ)

- ・ダンサー・振付家として活動しているが、生きることに向き合わざるを得ない体を持った人たちの踊りが観たいと思っている。路上生活者に興味を持って、2007年から人前で一緒にパフォーマンス活動をしている。
- ・(映像) アーツカウンシル東京の助成をもらい、今年の6月から来年の9月に向けて「日々荒野ツアー」を行っている。主に路上で、芸術に触れる機会の少ない方に踊りを提供して、メンバー勧誘も含めてパフォーマンスをする。東池袋中央公園でスタートし、神田のテラススクエアで歌手の寺尾紗穂さんとコラボ、川崎のトカイナカヴィレッジという個人の農地、文京区の光源寺でメンバーの写真展示と併せて、隅田公園、木場公園、錦糸町駅前、横浜の東福寺、井の頭公園でテニスコートさんという音楽グループと一緒になど。
- ・場所によって色々なことが起こり、色々な人が出会って何か生まれる。その景色を楽しんでやらせてもらっている。色々な場所で自分達が受容されている。2020年に意識を向けると、競う体に価値を見出すのではなく、多様な体に価値を見出して、その体をいかに生かすかを問うていきたい。自分たちのアプローチが真の意味での「生きる体」の再建の一環となると思う。

(3) おこわ(山口)

- ・「おこわ」は「音楽・こどもの城・わたしたち」の1文字ずつを取った略称。「こどもと音楽の未来をつくる」という催しのために結成されたグループで、学生、音楽家、ダンサー、保母、大学の教員など有志が集まって活動している。
- ・私は東京藝大で芸術哲学を研究している。子どもを産んでから、子ども向けのパフォーマンス・アートを見るようになり、奥深い世界があることに気づいた。青山のこどもの城には音楽室、美術室、体操室などがあり、障害児を含め、どんな子も分け隔てなく楽しませるプログラムが毎日行われていた。子ども向けプログラムには

注意を引きつける熟練の技術が必要だが、30年前の開館当時から専任の職員が毎日ライブを行い、20年以上かかってようやくプログラムができたという。2015年の閉館が決まり、築き上げてきた遺産が失われると衝撃を受け、それを引き継ぎたいと考え、音楽主任だった遠藤由加里さん、東京大学の小田部先生と3人で立ち上げた。

- ・ 催しではこどもの城の日常を再現しようと、朝10時半から夕方までいろいろなプログラムが繰り広げられる。国がやっていた施設を個人で再現するのは難しいが、11月に何とか3回までこぎつけた。3月に第4回を行う予定。こどもの城で行われていたプログラムと、子ども向けの工夫を凝らした新しい音楽プログラムを予定している。
- ・ 子どもの音楽への導き方など、こどもの城スタッフの技術を他の出演者が学ぶことができる。児童館系の音楽家の人達にも刺激的な相互作用が生まれていると思う。
- ・ (映像) 第2回では、東大の大きな運動室3室と休憩用に和館1棟を借り切った。来場者は子ども250、大人250、あわせて400～500人ぐらい。プロのデザイナーにほとんどボランティアで舞台をデザインしてもらい、前日にみんなで集まって舞台装置や装飾を手づくりする。子どもは音楽を集中して聞き続けるのが難しいので、後ろの方で美術家やアーティストがお絵描きなどのワークショップをやってくれる。
- ・ こどもの城に近い地域でと考え駒場キャンパスで開催しているが、経済的にも恵まれた親子が多い印象。できるだけ幅広い人に来てもらいたいので、渋谷、新宿の繁華街の24時間保育園などにチラシを持っていくが、情報を届けることが難しい。無料にするなどして参加者の幅を広げていくことが課題。

(4) ダイアログ・ジャパン・ソサエティ (鈴木 (麻))

- ・ ホームページで「Challenged change the world」という団体の思いを伝えている。障害者や高齢者と出会ってほしい。彼らならではの能力や豊かな感性や知恵がある。対話することでお互いの能力を生かし合い、社会を豊かに変えていきたい。
- ・ ドイツからプログラムのライセンスを取り、1999年からダイアログ・イン・ザ・ダークを行っている。視覚障害のアテンドに案内をしてもらい、8人のグループで真っ暗闇の中、目を使わない世界を体験する。視覚以外の五感が研ぎ澄まされ

て、人とのコミュニケーションのあり方が変わる。視覚障害のアテンドは暗闇の中
の専門家だからこそ頼りになる。関係性の変化も楽しんでいただける。

- ・ 今年度、アーツカウンシル東京の助成をもらい、ダイアログ・イン・サイレンス
とダイアログ・ウィズ・タイムというプログラムを加えた。前者は、聴覚障害者
がアテンドとなって、音のない世界でコミュニケーションを楽しむプログラム。(映像)
8月に20日間、企業の支援も仰いで、新宿で初めて開催した。言葉を使わず
にコミュニケーションをとるルールで、音が聞こえなくなるヘッドセットをして、
12名のグループで6つの部屋を巡っていく。手の動き、表情、サインで、それぞ
れ何を伝えられるかを体験し、みんなでゲームをし、最後にアテンドスタッフを交
えて対話する90分間のプログラム。約3,300人が参加し、20日間満員だっ
た。多くの方が満足したと回答くださった。表情の大切さがわかった、ボディラン
ゲージで言語の壁を越えた、その他、観察力、集中力などいろいろな観点をもち帰
っていただいた。声がなくても豊かに人と関われる、人の心の声を聞こうと思うな
どの感想が聞かれた。聴覚障害の方から、観察力があれば手話がなくても他の人が
何を伝えようとしているのか読み取れることに気づいた、という感想があった。
- ・ 既にダイアログ・イン・サイレンスを行っているドイツとイスラエルの団体から
トレーナーを招いて研修を行い、16名の聴覚障害者にアテンドスタッフとしてデ
ビューしていただいた。責任感や自信が出てきた、より自由に創造的になったなど
の感想をいただいている。
- ・ ダイアログ・ウィズ・タイムは70歳以上のアテンドと、年を重ねることの豊か
さを体験していただく。2020年に向けて、この3つが体験できるダイアログ
ミュージアムの開設を目指している。障害のある方たち、高齢の方たちだからこそ
提供できるエンターテインメントとして広げていきたい。

(5) 喜多能楽堂 (清水)

- ・ 喜多能楽堂は、能楽シテ方の流儀の1つである喜多流の本丸。公益財団法人十四世
六平太記念財団が運営する。約5年前に公益認定をいただき、外に向けた劇場とし
て活動を広げていこうと方針を変えた。冊子の30～33ページで活動を紹介して
いる。
- ・ 障害を持つ方のために何ができるか考えていた時、たまたまトット基金を見つけた。

手話狂言で有名だが、手話通訳の教室もやっていることがわかり、能に手話同時通訳をつけられないかと相談した。そして昨年、能に手話同時通訳をつける能楽界初の試みが実現した。

- ・ まず通訳用の台本をつくった。能の謡本を現代語訳にして、場面に区切り、手話で通訳できる形を整えた。次に通訳の立つ場所を考えた。上手側と、下手の橋懸りという出入りの通路の前に1人ずつ立ってもらうことにした。音楽だけでつなぐ囃子の場面をどうするか。例えば、いよいよ鬼が出てきて山伏たちに襲いかかるという緊張感が、激しいリズムでかき鳴らされるのを聞こえない人にどう伝えるか困っていたが、パイオニアさんの協力で体感音響システムを入れられることになった。
- ・ 昨年の初演は大好評をいただいた。健常者のお客さまから舞台の前2カ所に手話通訳がずっと立っているのが邪魔だという声が出たらどうしようと懸念していたが、反応は逆で、非常に面白かった、いつもの能よりよく分かったという声をいただいた。会場で配った台本と手話を見て、手話の流れを初めて知った人も少なくなく、健常者の手話への理解を広げることができたとも思う。出演者の声はまったく意外だった。謡の人たちは舞台から手話通訳者の背中をずっと見ているが、手話のリズムと能のリズムがシンクロすると感心していた。やってみて分かったことがいろいろあった。
- ・ 第2回のチラシで、舞台の客席形状と手話通訳の立ち位置、パイオニアの体感音響システムのついた座席をご覧いただける。今回はさらに、難失聴者のための補助システムとしてヒアリンググループという磁気グループを用意した。
- ・ 好評であり今後も公演を続けていきたい。「黒塚」を2年上演したが、来年は新作で「船弁慶」をと考えている。手話通訳用の台本があれば他の会場に持って行くこともできる。手話通訳はタブレット端末など特別なデバイスを必要としないのが大きな特徴。企業と組むことなどを含め、活動を広げていきたい。

(6) 日本児童・青少年演劇劇団協同組合（喜多村）

- ・ 日本児童・青少年演劇劇団協同組合（児演協）は、昭和50年の3月に設立、平成13年8月に協同組合の法人を取得した。現在は舞台劇、人形劇、影絵、パフォーマンスなど多岐にわたるジャンルの63劇団で構成される。
- ・ 事業の柱の第1は共同公演で、幼稚園・保育園児の鑑賞体験、小中高の演劇鑑賞教

室、こども劇場との連携による公演など。次にフェスティバル。主催事業の夏休みの児童・青少年演劇フェスティバルは45年目で、42ステージ、延べ5,000人以上が来場した。共催事業として、東京都のふれあいこどもまつり、佐久市とのキッズサーキット in SAKUなども実施する。3つ目に人材育成として、文化庁の委託事業で演劇人育成の連続講座等を実施する。機関誌『げき』の発刊、戦前から現在までの児童演劇関係者による証言集『証言・児童演劇』などの出版事業、「空の村号」、「ちゃんぷるー」、新作「Baby Space」、「KUUKI」など国際交流事業も行っている。

- ・ 乳幼児向けの新作「Baby Space」にアーツカウンシル東京の助成金をいただいた。
(映像) 振付家のダリア・アチン・セラランダー氏と私どもで、3～18カ月の乳幼児のための舞台芸術作品の日本版を創造して、昨年上演した。世界の児童・青少年演劇界でベイビードラマは今トレンドのジャンルとされている。空間から制作し、その空間で親子がのびのび過ごし、パフォーマンスを鑑賞し、終演後はそのスペースで遊ぶことができる、インスタレーションと一体化したパフォーマンス。対話形式とダンスパフォーマンスで、触覚、聴覚、視覚の3つの感覚領域を刺激する。
- ・ 言葉を獲得する前の乳幼児の発達に、演劇にしかない重要な役割があると考えている。神経細胞は胎内にいる時につくられ、視覚、聴覚、言語エリアを形成するシナプス、より高い認知機能の前頭葉皮質などは、1歳までの間に成長のピークを迎えると言われる。その大切な時期に、全感覚に訴えかける演劇体験を提供したい。
- ・ 障害児も同じ空間で共有できるような、インクルーシブな作品づくりを進めていきたい。来年1月に渋谷のかぞくのアトリエでBaby Spaceを上演し、地方5カ所を回る予定。発達障害などの子どもにも体験してもらえるよう、通常の公演の他にリラックスパフォーマンスと銘打った回を設ける。

2. 「アーツサポ東京」(社会福祉法人トット基金 佐藤)

- ・ 4年前から厚生労働省による障害のある人の芸術文化活動をもり立てていくためのモデル事業として、全国で10前後の社会福祉法人等が、美術分野を中心に支援活動を行ってきた。今年からパフォーマンス・アーツにも範囲を広げ、拠点を増やしていくことになり、社会福祉法人トット基金が東京都の支援センターを担うことになった。

- ・ トット基金は長く日本ろう者劇団を運営し、聴覚障害の人たちの演劇のジャンルで活動してきた。新たに障害の種類も芸術ジャンルも全てにわたる支援センターとして、「アーツサポ東京」という名称で7月に始動した。
- ・ 活動内容の第1は、相談の受付。どこでどんな表現活動や鑑賞ができるかといったご本人や家族からの相談などを受け付けて、回答していく。演劇分野以外のことはそれぞれ専門の団体、鑑賞についてはシアター・アクセシビリティ・ネットワークなど外部の力を借りて対応していきたい。2番目に、調査・発掘。団体やアーティストを広く紹介していく。3番目の研修会としては、主に支援人材を育てていくことが期待されている。他には、ネットワークづくり、ワークショップ等の催し物、情報の発信など。11月に立ち上げたウェブサイトを通じて、都内のいろいろな団体とその活動を紹介していくことも支援センターの任務の1つと考えている。幅広い層の方々に情報として利用いただけたらと思う。
- ・ 表現活動を始めたい人がそれぞれの思いに合ったグループに参加できるよう、あるいは鑑賞したい方に十分な情報が行き渡るよう活動を進めたいと考えている。各ジャンルでご活躍の皆様、ワークショップ、催し物、相談対応などについてご協力を仰ぎたい。

3. Tokyo Tokyo FESTIVAL 企画公募について

(1) 概要説明（アーツカウンシル東京 石綿）

- ・ Tokyo Tokyo FESTIVAL はオリンピック&パラリンピック開催3カ月前の2020年4月からパラリンピック閉会式の9月までに行われる東京都のフェスティバル。この時期に実施する企画についてアイデアを募る。
- ・ 対象分野は音楽、演劇、舞踊、美術、写真、文学、メディア芸術、ゲーム、伝統芸能、生活文化、ファッション、建築、特定のジャンルにとらわれない芸術活動全般。あらゆる表現活動が対象となる。
- ・ 期待する企画内容は3つ。「インパクトある芸術創造」は、オリンピック&パラリンピックの機に東京を国際都市として世界にアピールするクオリティと、21世紀の芸術文化を牽引する挑戦がある企画。芸術性・話題性があり国内外への発信力がある企画。2つ目に、世代、国籍、障害などを超えて「あらゆる人々が参加できる」こと。参加の仕方やプログラムに工夫があり、記憶に残る体験を参加者に提供でき

る企画。3つ目に、「アートの可能性を拓げる」もの。社会課題に向き合ってアートの新しい可能性を拓げるチャレンジ、社会に対するアートの視点を活かしたユニークな課題提起・発見がある企画。

- ・ 東京都とアーツカウンシル東京が主催者となり、事業費を100%委託する。自主財源や企業協賛金を追加することは可能。助成ではなく委託事業となる点を確認いただきたい。
- ・ 1件ごとの事業規模は数百万から2億円。フェスティバル形式などの大規模な事業ばかりでなく、大中小さまざまな規模の事業を想定している。2019年秋から2020年9月までの公演や展示は東京都内で行うことが条件。
- ・ 第一次審査はアイデアレベル。おおよその事業予算、プログラム内容、実施場所の提案などラフな企画を2月末日までに申請いただく。個人、団体、実行委員会のいずれでも、制作体制が整っていないだけでも申請できる。5月頃の第一次選考を経て、制作体制、会場などについて私共もサポートして、実施計画と精度の高い事業収支予算をつくっていただく。6～7月頃にプレゼンテーションで第二次選考を行って最終決定し、夏に契約を交わして事業開始という段取り。
- ・ これから審査会の体制などをつくる。分野も事業規模も多岐にわたるので、採択事業をイメージするのは難しいが、オリンピックの機を捉えて、ご一緒に新しい活動へのチャレンジをしていきたい。活動の基盤となり、2020年以降も継続していくようなプロジェクトの提案を期待する。

(2) 質疑応答 (石綿)

- ・ 2020まで毎年応募できるのか。(伊地知) →基本的には今回の1回だけ。(石綿)
- ・ 1団体が複数の企画を提案することはできるか。(小池、大橋) →件数の制限はないが、1団体から複数採択することはない。採択数は恐らく20～30件ぐらい。団体の他、個人で申請することもできる。(石綿)
- ・ 委託金が入る時期は。(柴崎) →基本的には精算払いを前提とするが、現在、調整を進めている。採択の時期までに固めておきたい。(角南)
- ・ 所在地が東京以外、ないしは他の県や市の補助、助成、委託などを受けている団体が東京で発表することは可能か。道府県や自治体等のお金との兼ね合いについてルールや制限があれば教えてほしい。(柴崎) →特にない。収入がどこからあるかは問

題にならない。申請者の居住地についての制限もない。海外から応募も可能。(石綿)

- 2つの団体が一緒に新しい企画を行う場合は、共催という形で申請するのが良いか。
(小池) →事業の主催自体は東京都と財団で、実施団体に対して委託することになる。委託金の他にも財源がある場合は、共催の形をとることになるか要検討。2つの団体が企画する場合は、実行委員会などをつくっていただき、そこに対して委託することになる。(石綿)
- 採択件数は20～30件ということだが、障害者の芸術文化だけでなく全体でということか。(小池) →全体の数。Tokyo Tokyo FESTIVAL にはオリンピック期間に東京の文化の魅力を世界に発信するという大きな目的があるので、それなりのインパクトがあるものが望ましい。(石綿)
- 助成の総額は幾らか。31～32年にシリーズとして展開しても良いか。(伊地知) →2020年のコア期間に山を持っていく、そこに向かって盛り上げていくスキームが必要。総額は、おおよそ15億前後となる見通し。(石綿)
- 財団としてもこれまでに経験のないスキームなので、いろいろな課題が出てくればその都度、現場の方たちのやりやすい体制を検討し調整していく。(石綿) →企画を考える人の意見を聞いて柔軟に事業委託の形を考えていくのは、画期的だと思う。
(吉野)
- 委託費の総額が15億円で採択件数が20～30という数字から、1企画当たりの予算規模を割り出すことができる。比較的小規模のものが採択される可能性もあるが、芸能や生活文化など幅広いジャンルの募集なので、申請数は相当多くなるだろう。(佐野)

(了)